晧台寺の羅漢さま

平岡　隆二

二〇一五年に刊行された『長崎談叢』第百号に、「晧台寺の羅漢石像群と小林謙貞―庭園内の甲群を中心に―」と題する拙文を書かせて頂いた。そこでは同寺の中庭に安置される十八羅漢石像が、崇福寺・大雄宝殿内の木彫十八羅漢（延宝五・一六七七年、宣海錦ほか作）の写しであることを確認したうえで、それが長崎の天学者・小林謙貞（一六〇一～八四）が天和二年（一六八二）に奉納したという羅漢像に比定し得るとの見通しを提示した。今のところご異論等は頂いておらず、内心安堵しているが、実は晧台寺にはもう一つ大変貴重な石像羅漢が現存している。さきの一群を甲群と名付けたので、こちらを新たに乙群と呼ぶことにし、以下紹介を試みたい。

乙群の羅漢さま（晧台寺後山）

その乙群の羅漢さまは、晧台寺後山の風頭山上、写真術で有名な上野（彦馬）家墓地の石垣のちょうど真下の場所にある。本尊の釈迦三尊像を中心として左右に八躯ずつ、計十六躯の石像羅漢が前後二列に配置されている。本尊台座に付された銘によると、これらは享保十八年（一七三三）十二月に、住宅唐人鉅鹿家二代の清兵衛道偉、唐大通事の彭城倫左衛門俊明、および「官梅林藻夫」（当時御用通詞兼大通詞の官梅三十郎か）の計三人が奉納したものと判明する。江戸後期の晧台寺住持・黄泉無着が編纂した「海雲年代考」（天保八年自序）に、「［享保］十八年癸丑［中略］天下饉［中略］山上羅漢之本尊三躰成ル。鉅鹿道偉（ママ）造之」と見えるのは、この乙群について述べたものに違いない。また各像の作風には複数の共通点を指摘し得るため（肩から肘の内側に向けて収斂する特徴的な衣文線を彫出すること、法衣環とその周辺の仕上げ、丸く膨らんだ膝頭など）、いずれも同じ石工らが彫造したものとみてよかろう（注1）。

ただ惜しむらくは、全像とも損傷がきわめて著しい。とくに元の頭部はすべて脱落し、現在の頭部はいずれも後代にセメント等で接合・固定されたものである。しかもそのほとんどに別像の頭部や石塊を接合するという交錯が見られるため、制作当初の姿を想像することは困難を極める。損傷の少ない胴体部の彫刻はじつに精巧で、近世長崎でも随一の風格を誇る羅漢さまであったと思われるため、現在の痛ましい姿には嘆息を禁じ得ないものがある。

ところで、風頭山上に現存するのは計十六躯のため、筆者もはじめこの乙群は十六羅漢として造像されたものと考えていた。しかし、それらと共通の法量・作風を持つ羅漢像二躯が福済寺に現存している。これはかつて風頭山上にあったものが、矢上の林田忍四郎氏の庭を経由して、福済寺に移設・奉納されたと伝わっている（渡辺庫輔「長崎町づくし」第一〇六回）。戦前までは同寺の鐘鼓楼前に設置されていたが、原爆の二次火災で損傷し、現在は一躯が寺務所の前に、もう一躯が境内の片隅に安置されている。すなわち、享保期に鉅鹿清兵衛らが奉納した「山上羅漢」は、十六ではなく十八羅漢だったのである。

このように、晧台寺に奉納された二つの羅漢石像群については、ようやく像数、造立年、奉納者などの基礎事項が判明するにいたった。しかし、そもそも当時の長崎町人たちは、一体どのような理由で、このように見事な羅漢石像を造立・寄進したのであろうか。この問題についてはなお十分な史料が得られていないが、この二群の奉納時期のそれぞれ直前に、近世長崎でも屈指の飢饉が起きていることは看過できない。甲群が奉納された天和二年の長崎は、連年の凶作により餓死者が出るほどの飢饉に見舞われ、有名な崇福寺の大釜もこの年に作られたものであった（『長崎実録大成』など）。また乙群が奉納された享保十八年の前年には、冷夏と虫害による享保飢饉のため畿内以西で多数の餓死者を出し、右に引用した「海雲年代考」にも「天下饉」と見えている。

とくに乙群の本尊台座には中央に大きく「為菩提」（死後の冥福のため）と刻むため、死者の供養のために奉納されたことは間違いない。これほど見事な石仏を大量に、連名で奉加したことを考えると、特定の個人を弔うためというより、飢饉で亡くなった多くの犠牲者の追悼と攘災を祈願したと考えるほうが、より自然であろう。もとより飢饉などの災害犠牲者の追悼のために羅漢像を寄進する例は、近世日本では珍しいものではなく、諫早・大雄寺の五百羅漢摩崖仏（元禄の水害）や、下関・常関寺の十六羅漢石像（享保の飢饉）、また盛岡・祇陀寺の十六羅漢・五智如来石像（元禄～天保の飢饉）など、枚挙にいとまがない。また鉅鹿清兵衛は若い時から多くの寺に寄進するなど信仰心が厚く（『唐通事家系論攷』）、その種の供養を行っていたとしても決して不思議ではない。このように考えてくると、鉅鹿らが享保飢饉の犠牲者追悼を、仏法の守護者たる羅漢の神通力に託して発願した可能性は決して低くないように思われ、またそれは半世紀前の天和飢饉の直後に奉納された甲群においても同じではなかったかと疑いたくなるわけである。

晧台寺の羅漢さまは、かつての長崎を襲った飢饉と、その苦難に直面した人々の祈りを伝える「災害遺産」であるかもしれない。この「仮説」を証するためにはもちろん今後の研究が不可欠である。しかしその可能性を検討することは、風頭山麓に残される他のさまざまな石仏、経塔、墓碑の背景を考えるうえでも、重要な論点となることは間違いないだろう。飢饉のみならず、地震や台風、火事や水害など前触れもなくやってくる災害は、われわれが知るよりもずっと大きな影響を長崎の文化に及ぼしていたのではなかろうか。今はもう訪れる人もなく、山上にひっそり佇む羅漢さまを見ていると、そのように思えてならないのである。

注1：なおかつて晧台寺末庵の聯燈院があった場所（弊振り坂を登り切った、町年寄墓地の下のあたり）にまとまって安置される五智如来、文殊・普賢菩薩、閻魔大王などの見事な石仏群も、その作風は乙群の諸像と通じるものがある。それらは諏訪町の石工・永田庄右衛門正廣と佐賀・砥川村の仏匠・平川長次兵衛信熊らが制作し、享保十七年十一月に寄進された可能性があり（『長崎市史・地誌篇』）、奉納時期の近さからも、乙群との関連が疑われる。今後の詳細な比較研究が俟たれる所以である。

謝辞　調査にご協力頂いた晧台寺、崇福寺、福済寺の関係各位と、乙群の存在をご教示頂いた原田博二先生に感謝申し上げます。

（熊本県立大学准教授）

――あとがき――

長崎歴史文化協会理事長　越中　哲也

一今年は長崎歴史文化協会創立三十五年、その機関紙「ながさきの空」も発行以来四十四号となりました。その間、多くの皆様方よりの御援助、有難う御座いました。

○昨年（平成二十八年）の本会事務所への来訪者二、四九二名、各方面よりの講師依頼により派遣させて頂いた数は九二件でした。

○昨年度、本会主催の各講座（自由参加、会費不要・資料代は各自）但し各講座ともに一、二、八月は休講。

一長崎学を学ぶ講座　毎週月曜日午前十時半より。講師は毎回不同（資料代二〇〇円）

一古文書を読む会　毎月第一・第三火曜日の二回。午前十時半より正午（指導　川原清、米田輝臣、久保美洋子。後見　越中）

一水曜懇話会　毎週水曜日午后一時半より三時。（江口、吉田、野口、末永（女）の各氏を中心に）

一食の文化を考えるサークル　毎月第二、第四金曜日午后二時より三時（脇山壽子女史・太田靖彦氏・大東良平氏を中心に）

○平成二十八年一月十八日（月）十一時、新年会を本会会議室にて開催、篠原会長を中心に会員、事務所のある桶屋町自治会役員他多数参加。盛会であった。

○五月四日（みどりの日）恒例により「第十回　憲法さるく（長崎県九条の会主催・本会協力）にて「長崎の史跡」を散策。今回は午前十時中町公園集合。中町教会、二十六聖人遺跡、片足鳥居等、長坂西坂街道を…。講師（本会会員…大東・山口（広）・陸門・田中（安）・吉野・松澤・原田・平野の各氏）

○十一月十五・十六日。恒例となった第三十八回名古屋椙山女学園高校の「平和学習修学旅行」。学生三百余名来崎。之の内・本会では六コース担当、講師として山口（広）、大東、陸門、松澤、北川、丹田の各氏を派遣。学生より多くの礼状を戴いた。

○十一月三日、第九回長崎市立図書館主催、「長崎学講座」開講。恒例により「長崎の絵画」につき学習、今回も後半に長崎市都市経営室室長原田宏子女史と対話、参加者多く好評でした。

○長崎商工会議所より、先年より「長崎観光検定試験」が全国的に有名となったので平成二九年一月二九日・第十二回検定試験を実施するので昨年同様協力依頼あり。今回も試験会場を長崎・東京で開催するとの由。

○十一月二十八日、二十六聖人記念館長レンゾ神父様来訪あり。本年四月よりイエズス会管区長の任命を受け東京に移られるとの事御祝辞を申し上げた。

ながさきの空（第二十八集）

平成29年2月発行

発行者　株式会社十八銀行
長崎市銅座町1番11号
☎095 (824) 1818(代)

編集者　長崎歴史文化協会
☎095 (821) 1540

制　作　株式会社 インテックス

印　刷　株式会社 インテックス

非売品